

# 宣教師と西南学院

— May thy sweet mem'ries linger long (“Ah, Seinan!”) —

田中 輝雄

## I

西南学院の創立は1916（大正5）年であり、今年は92歳ということになる。創立者はC. K. ドージャー先生で、米国南部バプテスト連盟の外国伝道局（Foreign Mission Board）から派遣された宣教師であった。この形は戦争の一時期を除き、つい先年まで続けられ、西南学院は開設以来多くの優れた宣教師を送ってもらった。南部バプテスト連盟諸教会の同信の友が祈りをもって送ってくださった贈り物だった。その熱心な宣教師の先生方（missionary teachers）が伝道活動のほかには献身的に生徒、学生たちの教育に当たってくださった人的、そして経済的支援に対しては、われわれは百万言を費やしても感謝し尽せないだろう。

しかし、ここ20年ほど前からミッション・ボード内の組織・考え方が徐々に変わり、雲ゆきが怪しくなったようで、SBC/IMB<sup>1</sup>による新しい信仰宣言の内容は西南学院に関係がある先生方には当然深刻な問題となった。結局、とうてい是認できるものではない、としてこれに署名を拒んで「解雇」となることを全員選ばれたとのことである（2003年ごろを中心に正式決定？）。本紀要第3号にはその経緯についてK. J. シャプナー先生が寄稿されるので、その辺りのことについてはより明らかにされるのではないか、と思っている。

ここに私が西南学院の院長としてミッション・ボードの局長、P. K. パークス博士に書いた手紙のコピーがある。1992（平成4）年10月16日付となっているが、局長が近く辞任されるということを知り、彼がミッション・ボードの長としてこれまで西南学院に対してご支援、ご協力をしてくださったことに深く感謝する旨を記したものである。その中心の趣旨は以下のとおりである。（辞任は上述の「雲ゆき」と関連があるのでは、と思っている。）

---

1 SBC＝南部バプテスト連盟（Southern Baptist Convention）、IMB＝国際伝道局（International Mission Board）

私は貴ボードの諸問題について少しはお聞きしましたが、詳しくは知りません。ただ、あなたがボードを去られることはまことに残念です。これまでのお働き、西南学院に対するご支援に対して深甚の謝意を表するものです。またあなたのスタッフ、南部バプテスト諸教会の皆さまにもよろしくお伝えください。

そして、最後に当時西南学院で奉仕しておられた10名の宣教師の先生方にも触れ、福音伝道、教育の両面で良い働きをしておられることを述べ、そのお名前をリストにした。それは G.W. パークレー、A. コールマン、J.W. ダーリー、D.A. ジョンソン、H.C. ジョンソン、K.J. シャフナー、L.K. シート、D.Y. 屋宜、H.H. ヤング、N.L. ヤングの諸先生である。

西南学院にとって、宣教師受け入れの制度が無くなったことはまことに残念なことながら、先生方はご自分の良心と信仰に従って、正しいと思われる道を選ばれたのである。ただ私は、ミッション・ボードが学校の創立時から中断の時期はあったものの、一貫した方針で宣教師派遣という形で、人的に、そして財的に大きく協力・援助をしてくださったことは忘れてはならない、と思っている。

## II

さて、私が初めて西南学院専門学校の門をくぐったのは1948（昭和23）年の春、久留米の旧制中学明善校を卒業した後、英語をもっと勉強したい、という気持ちが強く、入学試験を受けた時である。ちょうど明善で一年先輩の N さんが西南の英文科で学んでいて、彼の家で西南の話をたっぷり聞かされ、ぜひ入りたいと思った。英語の教科書（原書）を拝ませてもらい、またアメリカ人の宣教師がいて、英語で授業をするよ、と聞いてへえーと思った。それと男女共学で女子学生と一緒に勉強する、ということにも男子校出身の私には興味があった。中学校では数学が全くダメだった私には、西南の入試には数学はない、とどこかで聞かされていて、それを信じて安心していたが、当日はちゃんと数学の問題も二題あり、がつくりきた（数学の勝率50%）。幸いなんとか合格することができ、久留米から通うことになった。「宣教師」の話が魅力的だったことは言うまでもない。

ここで、学院がお迎えした一人の宣教師の先生について少し触れるべきだと思う。「創立者」C.K. ドージャー先生のことであるが、先生はその磊落な人柄、性格といったもので人を惹きつけられた反面、また強い信仰によって立ち、先生にとっては聖書の教えに反する、ということに関しては頑として譲られなかったことはよく知ら

れている。開学しておよそ10年後の1927年ごろのこと、いわゆる聖日（安息日）にスポーツの対校試合に出る、ということ固く禁じられたものだから強い野球部などの関係者が猛烈に反発し、遂に禁を犯して退学処分も辞さぬ、ということになった。ストライキもあり、この「日曜日問題」はドージャー院長を苦しめることになり、院長の辞任というところまで発展した。多くの方がよくご存知のことである。いろいろあって、公式試合に限って日曜日の試合出場が公認されたのは10年以上後の1940（昭和15）年のことだった。

私は上述のとおり戦後の1948（昭和23）年に入学したのだが、それからそう間もない頃だったと思う。校庭の片隅でクラスメート数名がいろいろだべっているときに、一人が「宣教師はいばつとるねえ」と言ったのである。私ははじめからずっと、宣教師の先生方は優しく謙虚な人たちだ、という印象をもっていたので、その全く逆の意見には驚いてしまった。その時の雑談は他の一人が「そうでもないよ」と短い反論をただけで終わってしまったが、最初の学生がどんな理由で「宣教師はいばつっている」と思っていたのか分からない。あるいは戦勝国からやってきたアメリカの先生で、いつもはっきりと断言する癖があり、「信仰」に固く立っているせいか、人に対して抑圧的にまたは断定的に物を言う、そういう言動が多い、と見ていたのか（対個人の感想かそれとも対グループかの問題もあるが）。「いばつっている」ということとは真反対の印象しか持っていなかった私には驚きであったし、人に接する場合いろんたとらえ方がある、という当然のことを改めて知らされたことである。

### III

私は西南の専門学校で3年間学び、卒業と同時に西南学院中学校に英語教師として奉職することができた。そこで2年間教え、その後2カ年は大学の3年編入試験を受けて学生の身分に戻ったが、その間は中学校のご好意により、今までどおり中学校の教師として教えることを許された。今の言い方をすればその2カ年は「社会人学生」として3年生、4年生の課程を学び終了することができた。そして1955（昭和30）年の3月に卒業した。このたび、「宣教師と西南学院」という大きな題をいただき、西南学院における宣教師の先生方に、学生として、同僚として、そして役職者（学長・院長）として身近に接してお考えや悩みを少しは知ることができたと思う。図らずも三つの立場から見せてもらった者として考えてみる機会となった。もちろん、このことはもっぱら、私の西南の学生・教員としての期間が比較的長かったことによるものである（入学から定年退職まで53年。教員はちょうど50年）。



打ちとけた雰囲気で大衆祭の仮装行列に親子で参加したホートン先生

まず、日本の片隅にある小さな、無名のクリスチャン・スクール西南学院に赴任するために、各々の「志願者」はどのような覚悟と決意をもって準備されたのだろうか。それは一言で言って大変なものであったろう。まず第一に言葉の問題がある。アメリカの人にとって、日本語の習得は、少なくともわれわれ日本人が英語を習得するのと同じくらいに困難なものであろう。日常生活における

、変わった風習、習慣に慣れねばならない、土地の人と心を開いて「打ちとけ」ねばならない、そして何しろ普通の先生にはない伝道という公的な大役があるのだから。それから既婚者には成長していく子どもがあればその教育の問題もある。

#### IV

私はいつも宣教師の先生方が良い働きをしてくださって大変だろう、ありがたい、という感じを抱いていたので機会あるごとにその謝意を表すことにしていたが、多くの先生方からはたいてい、「西南学院で教えさせていただいてありがとうございます」といった謙虚な返事がかえって来た。そこで、少しまとまった形で先生方のご意見、ご要望を忌憚なく出していただく、ということで「学長と大学の宣教師教員との懇談会」を年1回開くことにした。記録によると1986年から1990年の計5回（1989年はなぜか開いていなくて1990年は1月と12月の2回）であった。お忙しい先生ばかりなのに—もちろん帰米休暇の人を除いて—毎回全員出席。60～90分ぐらいを取って率直な意見、希望、提案などを出していただいた。以下、第1回目と第5回目の記録を摘記してみよう。

1986（昭和61）年10月15日

田中 「日頃大学のために良い働きをされている宣教師の先生方に感謝の気持ちを伝えるとともに、先生方の大学に対するご要望などを伺うためにこの会を計画した。本日はお集まりいただき感謝している」

A. 教員の学内定数において以前は1.0でカウントされ、その後0.5になり、数年前

にゼロとなったことはよかった。おかげで各学部で自由に宣教師が採用されるようになったのはいい傾向だ<sup>2</sup>。

- B. 大学の国際化に特別な関心をもっている。もっと留学生を増やしたい。交流校も拡大したい。
- C. 西南はキリスト教をベースにした教育が第一の独自性とすれば、第二は国際性だと思う。
- D. 外国人教員がこれほど大勢おられることはすばらしい。宣教師として感謝すべきことと思うと同時に、学院としてもプラスになっていると思う。しかし心配なのは西南学院が外国で十分に理解されているか、またクリスチャン・スクールとして奉仕していることが果たしてよく知られているか、ということだ。こちらのバプテスト教会の方々にももう少し学院を知ってもらいたい。
- E. クリスチャンの先生の比率がさがっており、心配している。宣教師を呼ぶとき論文を書かねばならぬことが問題となった。

などの意見が出された。

その後、宣教師の任用について意見の交換をした。学院とボードの間の連絡をより密にすることが必要との意見や、別件だが入試や定期試験の際、宣教師に監督の割当がないことに不満を感じていた人もあるようだ、などの意見が出た。

1990（平成2）年12月6日

田中よりいつもと同じく本日のご出席および日頃のよきお働きに対し感謝している、今回も本学をご覧になって質問、ご意見等があれば忌憚なくお出しいただきたい、との挨拶のあと懇談に入った。

- A. 今回は田中学長からも私たちへの希望や願いがあれば出していただきたい。できるだけクリスチャンの教師を採用していただきたい。
- B. 最近、いろいろな先生方と話して、ひとつ心配しているのは原理統一教会（世界基督教統一神霊協会）のことである。あるゼミ生は入会していて授業をよく休んでいるそうである。特に問題になっているのは3、4年生で、本学の学生は宗教に関心をもっているのとくに勧誘されているようである。
- C. ある先生から聞いた話であるが、キリスト教学の授業にがっかりしたからよそのグループに入ったそうである。1年生対象のキリスト教学はもっと魅力的な

---

2 各学部・学科は、学生定数や学部などの性格により教員を何名まで採用してよいか、決まっている。「数年前にゼロになった」とは、宣教師をその定数の枠に入れなくてよいことになった、の意。

ものであってほしいと思う。特に1年生は求めているようである。

- D. 1年生のキリスト教学を担当することになったのでどのように教えたら良いか悩んでいる。しかし、非常に良い機会なので頑張ってみようと思っている。
- E. アメリカの私大では規則で失格となる欠席日数が決まっているが、西南では規則としては決まっていないようである。
- F. 現在の学生は、キリスト教にも英語にも関心がない。他の先生方にお尋ねしてもそれが全体的な雰囲気のようなのである。チャペルの出席率も減っているし、授業中も私語が多い。精神的な問題を抱えている学生が多いようであるが、学生は本学にカウンセラーがいることを知らないのでは？
- G. 先生の中には出欠をとらない方もあるので、学生も出席する必要はない、と思っている。大学のポリシーもない。
- 田中 高校の久保校長から院長に、ジャーニーマン<sup>3</sup>の派遣を要請して欲しいとの依頼があった。可能性はどうだろうか。
- H. 要請は出せるが実現はどうか…。

この5回にわたる（1986～1990）「学長と宣教師教員との懇談会」では、先生方は打ちとけた雰囲気の中で率直な意見、感想を述べてくださり、学長としても大いに教えられ、参考になった。ここに引用していない、残り3回の集まりで出た問題・話題は、大体以下のとおり：

- (1) クリスチャンの教員が少なくなり、宣教師の数も学生数の増加に比して減っていること（10年先、20年先の特に大学はどうなるか心配）
- (2) 外国人留学生をもっと増やして欲しい。
- (3) 永く日本で奉仕したいと思っている。
- (4) 神学部の一体化を検討して欲しい<sup>4</sup>。
- (5) 大学にはないが、リッチモンド（＝ミッション・ボード）のポリシーに対して文句がある。（1988年）夏の宣教師会の決定には皆大変なショックを受けた。
- (6) クリスチャンコード<sup>5</sup>を守ることについて。

---

3 原則として、26歳までの青年が短期間（通常2年間）現地派遣され宣教活動をする制度。日本語の学習は必要ない。

4 神学部は初めから干隈にあり、いわゆる「干隈キャンパス」であった。当時、神学部も山を降りて、西新キャンパスに合流することが強く望まれていた（2001年に実現）。

5 院長、学長などの役職者は、キリスト者でなければならない、といった取り決め。

- (7) 4年生のキリスト教学が必修でなくなるのが残念。理事会ではどう考えているのか。多くの学生が選択してくれれば良いが。
- (8) 宣教師から大学開学40周年の際の表彰に対するお礼と、火事のお見舞いとして10万円のご寄付をいただき、感謝している。(田中)
- (9) 入試(採点を含む)については宣教師の参加について賛否両論があるようだができるところから徐々に拡げてもらえればありがたい。
- (10) 「宣教師の先生方」という呼び方はよくないと思う。宣教師じゃない、という気持ちがある。(この発言の真意ははっきりしないが、当日の会の性格上、司会・進行係の学長が「宣教師の先生」ということばを繰り返し使ったので出てきたのだろうか。あるいは日頃から「宣教師」、「宣教師の先生」としよっちゅう言われるのでなにか特別視されているようであまり嬉しくない、と感じられていたのか?確認する機会を失したが留意すべきこととあとで反省。)

## V

どの先生もそれぞれの召命を受けて西南学院に来られた。希望ばかりではない、心配や不安もあったはずだが、神の導きがあったと感じられたに違いない。ところで、前記の先生方はほとんどすべて大学関係者であったが、私が中学の教員の時にお会いした二人のご婦人がおられた。ミス・タッドとミス・グラスで、お二人ともずっと中国で宣教師として働いておられたが、中国共産党による政変で中国から追放され、西南学院の中学校・高校で英語を教えられるようになった、と聞いた。西南におられたのは5年間(1950～1955年)であった。

タッド先生は60歳ぐらいの白髪の老婦人でとてもお元氣、グラス先生は42～3歳で温和そのものの方であった。私は時間が許すときはお二人の授業について行って、様子を見、ヘルパーの役目をつとめた。生徒たちは行儀が悪かったわけではなく、英語による授業だから、時々日本語で簡単な説明をしてやる程度であった。タッド先生の授業では力を込めて単語の発音などを繰り返されるものだから、生徒も喜んで先生のジェスチャーを真似たりしていた。考えてみるとあの頃中学1年生、2年生で「ネイティブ」の先生から英語を教わるのは私学とは言え、ぜいたくだった、と言うべきだろう。タッド先生のクラスでよく繰り返される“Be seated.”(お座りなさい)を“Be silly.”(愚か者になれ)と聴き違えて「先生、わかりません」と数名が意味を聞きに来たときには笑ってしまったが、同時に考えさせられた。今でも同窓会などで会って

お二人の先生の話が出ると、「あの頃もっとまじめにやっておけばよかったのですが…」と還暦前後のオヤジが嘆いたりしている。グラス先生は大学生のバイブルクラスも指導しておられた。

## VI



グレーヴス先生のお宅にはよく学生が集まった

最後にもう一人、長い間いろいろとお世話になった宣教師の先生について少し詳しく書いておきたい。アルマ・グレーヴス先生である。大学の広報紙「Seinan Spirit」の2001年 Spring 号（136号）に先生の訃報が載った。内容は以下のとおりである。本学名誉教授のアルマ・グレーヴス先生（英語学・英文学）が昨年（2000年）12月25日、米国ルイジアナ州の療養施設で逝去された。享年93。先生は1938年本学の前身である高等学部（当時）教授となり、太平洋戦争直前に一時帰国、47年に復職、定年退職する76年まで文学部教授として教育研究にご尽力、68年に勲四等瑞宝章を受章、76年には名誉教授の称号を授与された。在任中は E. S. S. の学生にシェイクスピア劇（英語劇）を指導されるなど心から学生を愛する教育者として学生に親しまれていた、云々。

まさにその通りで、西南大英文科の名物教授と言っても良い先生であった。私は前述のとおり、西南学院専門学校に入った1年生のときから親しく教わり、指導を受けた。教室ではびしっと教えられる、凛とした厳しい感じの先生だったが、本当は優し



い先生で時々冗談を言っってはわれわれを笑わせたりされた。1年生のときのテキストはジョン・バニヤンの『天路歷程』(The Pilgrim's Progress)で、先生がretoldされた易しいものであったが、授業はすべて英語で通された。クラブ活動(E. S. S.)の指導も熱心にされ、特に英語劇(シェイクスピア)を長年続けられたことでわれわれ学生は相当英語で鍛えられ、シェイクスピアをより深く理解したのではないと思う。シェイクスピア劇は1950年から1976年の間に、休暇でご不在の2回を除き、25回監督の大役をしてもらったことになるようだ。私は『ヴェニス商人』のユダヤ人の金貸し、シャイロックをやらせてもらった。

もう一つの大きな仕事は、1951年の「マッカーサー」杯争奪のスピーチコンテスト(毎日新聞主催)で九州代表として臨んだ3年生、豊田佳日子君が優勝してトロフィーを西南学院大学にもたらしたことである。豊田君に聞くとずいぶん練習では鍛えられたらしい。優勝については、特にわれわれ英文学科の学生も鼻が高かったことは言うまでもない。

私は1998年12月半ばで学長の任期が終わり、教室に戻った。そこで休暇を利用してすぐに家内と一緒にグレーヴス先生のお見舞いに行った。ご高齢で弱っておられると聞いていたからである。ニューオーリンズから真つすぐな一本道(低い土手?)が大きなポンチャトレーン湖の真中を走っていて、タクシーでそこを2時間前後も走ったろうか、グレーヴス先生の故郷フランクリントンに着いた。先生は車椅子に乗って親戚の3、4人と待っておられたが、こちらがハッとしたのは、挨拶をしてもわれわれのことに全く気づかれなかったことである。認知症が進んでいたのである。反応としては、「サンキュー」「サンキュー」と繰り返された。先生は髪をひつつめ髪というかそんな風に結ってあり、きれいな顔でおだやかに、静謐そのものの姿であった。私はふと思いついて、先生の側にかがんで先生の作詞になるカレッジソング“Ah, Seinan!”の一番をゆっくり歌った。よく聴かれた歌だから反応があるのでは、と期待したのだが、残念ながらそれは充たされなかった。しかし、お別れの挨拶をしての帰路、いろいろのことが思い出された。1957年夏に私が留学で米国に出発するとき一言“Be yourself”(あなたらしく自然にふるまいなさい)との忠告をくださった。私は先生の心の状態に深い悲しみを覚えると同時に、先生のご様子のすべてから何か平安といったものを感じた。先生はそれからちょうど二年後、2000年のクリスマスの日逝去された。

## VII

西南学院はC.K. ドージャーという宣教師によって創立されたのであるから、当然、宣教師と西南学院というものは、初めから切っても切れない関係にあったと言わねばならないし、戦争中を除いてミッション・ボードを通して多数の有能で熱心な宣教師の先生方が来学され、多くは長年学院で教育の働きに尽力されたことは、これまで記したとおりである。その中で、私の計算に誤りがなければ、8名の先生が学院・大学の役職（院長または学長）に就かれている。C.K. ドージャー、ボールデン、ギャロット、コーブランド、E.B. ドージャー、ホエリー、シート、パークレーの諸先生である（就任順）。C.K. ドージャー先生には「西南よ、キリストに忠実なれ」との遺訓があり、誰でも知っている。モットーとして響きもよく、意味の上でも歯切れよく聞こえるので、そこに含まれた深い意味をあまり考えない危険がある。ご子息のE.B. ドージャー先生（同じく宣教師）は、求められてもつとわかり易く「神と人にと誠と愛を」（Faith and Love to God and Man）と言い換えられている。しかし、何と言ってもC.K. ドージャー先生の生き方、ことばは強烈なインパクトを与えている。なにしろ、ご夫妻は文字通り献身的に奉仕し、骨を日本に埋められたのであるから。C.K. ドージャー先生が院長排斥のストライキの後、辞任されてから、第三代の院長にはG.W. ボールデン先生が就任されたが、C.K. ドージャー先生とは対照的に、学生の希望、要求をよく聞き、理解を示された。「信仰一本」ではない、リベラルな方だったとのことである。そのせいか、この先生はボードの覚えはめでたくなくて、また「アサ会問題」<sup>6</sup>などという問題にも遭遇されて、短期（1年半余）で辞任し、学院を去られることとなった。

キリスト教学校の西南学院は今後どう進み、何を目指すべきなのか。キリスト教主義の堅持、奉仕の精神の具体化、等々、この小文の中で私が引いたり、触れたところの特色や課題についてはこれまでの宣教師の先生方の言行が参考になるであろう。一つの方向としてそういったものも吟味し、時代に則したものとしてこれからも生かしていくべきであろう。そのことに関して、現在、「宣教師碑」を建てることが計画中のことで嬉しいことである。西南学院がそのようなものを作るのは初めてではないだろうか。立派なものを作っていただきたい。カレッジソング“Ah, Seinan!”のことを上に書いたが、その中のリフレインに、“May thy sweet mem'ries linger long”（汝の楽しき思い出が長く続かんことを）という一句がある。母校である西南に呼びかけたものだが、この一文では歴代の宣教師お一人お一人に捧げる想いとして、サブタイトルとさせていただいた。

---

6 このあたりの経緯については『西南学院七十年史』（上巻）612～624頁参照。